

# 市民による市民のための地図作り環境と活動成果の共有に関する調査

## 1 「まっぶde コミュニケーション」とは

多くの市民活動において地図作りが行われているように地図の有効性は説明するまでもない。しかしながら、紙ベースの地図では、情報修正や情報共有に労力やコストがかかるなど問題があり、時には地図作りが目的化してしまい活用まで至らないなどの問題もあった。

そこで、Big Mapでは、インターネットを利用したWebGIS（注1）システムを「まっぶde コミュニケーション」として提供している。このシステムは、特定非営利活動に従事する各種団体（PTAや町内会等）が公共性の高い地物情報（注2）を収集する目的で無償で利用できる。

### ①システムの概要

「まっぶde コミュニケーション」は、Big Mapが

めざす「地図を通じたコミュニケーション活性化」というテーマを実現するために自ら企画し、開発したオリジナルのWebGISシステムである。

インターネット経由でアクセスする地図の上に、みんなでコミュニケーションを楽しみながら場所に関わる情報を書き込み、オリジナルの地図に育てていくためのツールである。（図1）機能については詳しくはホームページを見ていただきたい。（<http://www.bigmap.org/>）

### ②システムの特徴

システムの特徴を以下に述べる。

- ・ 収集された情報をメンバーで分担して同時入力可能
- ・ 入力されたデータはデータベースに保存されるので、様々な再利用が容易
- ・ 個人情報を含むプライバシー情報が一元的に保存

- ・ 情報の散逸を防止
- ・ ユーザーの管理が厳格で、権限に応じた情報へのアクセス制御が可能
- ・ SNS（注3）の機能を利用したメンバー間の情報交流の仕組みが充実
- ・ 写真や動画などの表現力が豊かな情報と地図を統合して閲覧可能
- ・ デジタル地図ならではの任意の拡大縮小やつなぎ目のない全国地図の利用が可能

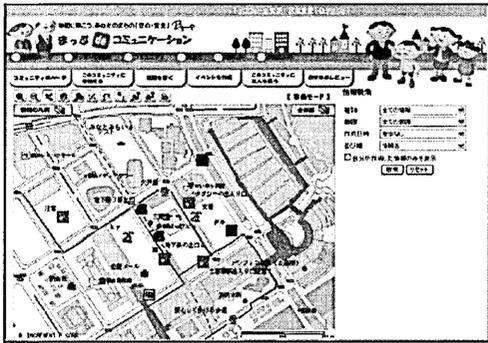


図1 まっぶde コミュニケーション (MDC) 画面イメージ

## 2 「まっぶde コミュニケーション」の可能性

地域活動の中で地図作り活動を行うことのメリットおよびデメリット並びに「まっぶde コミュニケーション」のメリットを記述する。

### ①地図作り活動のメリット

- ・ 活動情報を地図に表現することで活動成果が目に見えるようになり、活動継続への、モチベーションが向上
- ・ 情報を視覚化することにより、情報が見えやすくなる
- ・ 異なる種類の情報を地域という同一の土俵に表現できる
- ・ フィールドワークというイベントを通じて地域の一体化が実現できる可能性
- ・ 誰でも参加できる手軽さ

### ②地図作り活動のデメリット

- ・ フィールドワークイベント

執筆

野崎 隆志  
特定非営利活動法人Big Map

（注1）  
GIS (Geographic Information System, 地理情報システム) とは、コンピュータ上の地図情報にさまざまな付加情報を加え、データを作成・保存・利用・管理し、地理情報を参照できるように表示機能をもったシステム。これをインターネット上で使えるようにしたものがWEBGIS。

（注2）  
地物情報とは、天然、人工にかかわらず、地上にあるすべてのもの。

（注3）  
「ソーシャルネットワーキングサービス (Social Networking Service)」の略。パソコンや携帯電話を利用してサイト内の日記や電子掲示板を利用したり、地域情報などを入手したりすることができるインターネット上のサービス。コミュニケーションや情報共有のための様々な機能を持つ。

トに参加してもらおうことの難しさ  
紙でつくられるため、収集データの保存が困難  
別な用途に使う場合の情報整理等の追加作業の煩雑さ

#### ④「まっぶde コミュニケーション」のメリット

- WEB上の地図である「まっぶde コミュニケーション」では、フィールドワークというイベントを前提にしないで、情報収集活動が行えるなど、一般の地図作り活動のメリットがカバーできる。
- 分散入力による入力者の負荷軽減
- 特定メンバーでの情報共有が可能
- 情報がデータベースによって管理され、様々な用途に応じて再利用が可能
- インターネットを利用するため、どこからでも閲覧が可能
- さまざまな種類の情報を重ね合わせることが可能
- 一つのポイントに様々なデータをリンクさせることが可能

#### ④「まっぶde コミュニケーション」の課題

以下のような点は、イン

ターネット等の課題そのものとして今後も改善・改良が必要である。

- パソコンやインターネットが使えなければならぬというデジタルデバイスに対する課題(図2)
- 情報漏えいに対するリスク
- 分析的利用にはむいていない。
- 表現が一律になりがち
- 運用等のコスト負担

デジタルデバイスやIT環境整備コストの課題は、地図作りに限定されたものではなく、むしろ、地図作りを盛んにすることで解消していくものと考ええる。

#### ⑤まち作りへの応用

地図はまちを可視化するすぐれたツールである。そして、

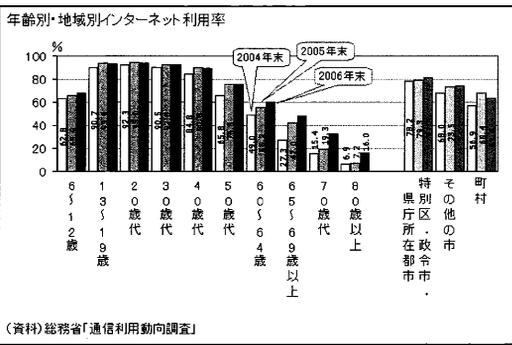


図2 年齢別・地域別インターネット利用率

一般市民が解決したい課題は、行政が捉える単位より更に身近なエリアに関する事項で、それを分析する情報(データ)はこれまでデータ化されていなかった。

まずは地域の情報が行われ、可能な限り多くの住民を巻き込んで地図を囲んで議論できることは、まちの課題の解決に当たって合意形成を図る上で強力な武器になると言えよう。

「まっぶde コミュニケーション」を、まちの課題を自分のこととして認識するためのツールとして位置付け、普及させていきたいと考えている。

#### 3 安心・安全マップの課題

Big Mapはいくつかの地域防犯活動にかかわってきた。活動を進める上では、防犯に繋がる情報を共有し、個々人の意識を高めることが重要で、安全マップ作りの効果は高いが、その効果が参加者に留まり、地域の防犯対策や交通安全対策へ繋がりにくい状況にあった。例えば、防犯パトロールと登下校時の見守りでの情報共有や行政機関が持つ情報の共有など実現できていないことが多い。また、設備の拡充や改善による対策

に生かしていない。

#### 4 横浜会議への提案

私たちはこうした課題認識から、横浜会議に提案を行った。

収集した情報が各所で生かされるためには、一定の基準が必要との考えから、基準作りとそれを浸透させるための教育プログラムの研究開発を主テーマとして、安心・安全マップづくりの活動に見識のある有識者の協力を得て検討会を開催し、研究活動を行った。

#### 5 研究活動

##### ① 検討会の開催

検討会は横浜市立大学、東京大学、横浜国立大学、フェリス学院大学、地域活動団体の関係者や市役所の職員などの協力を得て開催した。

検討会は3回、その成果のレビュー報告会を開催した。

地域として、検討会メンバーがかかわりのある中区初黄日之出町地域、磯子区洋光台地域、泉区中田地域を選定し、地域分析と地域課題の洗い出しを行い、地域課題に繋がる情報の具体的な収集基準の割り出しと基準案の創出を

検討した。

初黄日之出町地域では、まちの浄化推進プロジェクトが進行中で、小学校の安全マップ作りの授業から地域へ展開を図っている最中である。

洋光台地域は、計画的に整備されたまちで、比較的安全に見られている。

泉区中田地域は、旧来からの道幅が狭く見通しが効かない通りも多い地域だが、3校合同の地図作りなど先進的な取り組みが多い。

また、検討会では、現状の安心・安全マップ作成時ににおける課題をあぶり出した。そして、検討会メンバーが安心・安全マップ作りの課程で行ってきたフィールドワーク活動の実例も合わせて、安心・安全マップ作りにおけるノウハウを活動の基本的な方針である「活動バイブル」や活動を進める上でのガイドライン等にまとめた。

検討会では、対象者が子どもから高齢者まで幅が広いことから、まずは情報収集から始まる地図作りのプロセスを明示し、誰でも始めることができるようにし、教育プログラムに盛り込むことで一致した。

また、地域の課題は地域の住民特性や地域性によって異

なることは3地域を見ても明らかで、事前に地域の課題を固定的に捕らえて、情報収集メニューを固めてしまうことは、一種の強制となり自ら考えない状態を作り出す可能性が指摘された。

これもプロセスのみ提示し、何を収集すべきか、誰が主体となるべきかは「活動バイブル」を検討する段階で、地域コミュニティで主体的に課題を議論し、地域全体で合意することにした。

従って、情報収集の基準は情報収集対象項目を一覧にした種別リストに明記する程度とし、地図作りのプロセスをガイドライン化することに重点を置くこととなった。

これまでの実証実験的な活動を通して「まっぶde コミュニケーション」システムの機能面での改良は進んだものの、システム的には解決が難しい運用面での課題解決が急務であった。安心・安全マップを作成する活動の担い手である地域住民をいかに組織し、スムーズに地図作り活動を始められるか、というプロセスが重要視されたのは当然の帰結と言えよう。

## ② 検討結果の検証

これらの成果を横浜市内の各

地で行われている安心・安全マップ作りに適合するかどうかを、現地でのフィールドワーク等の活動を通じて検証し、改善すべきポイントをとめた。その際に、各グループにおいて、活動の目標や活動メンバーおよび収集する情報の定義、注意事項をとりまとめた「活動バイブル雛型」を作成した。

## 6 ガイドラインを 活用した地図づくり

検討会の議論を経て、再構成されたガイドライン等には以下のものがある。これらは、すべて地図づくりにむけた講習会でテキストとして活用される。

- ・安心・安全マップ作りのてびき(導入編)
- ・安心・安全マップ作りのてびき(学習編)
- ・安心・安全マップ作りのてびき(世話役講習会編)
- ・活動バイブル雛形(安心・安全マップ編)
- ・種別リスト
- ・操作てびき
- ・ビデオ

課題となった地図作り活動全体のプロセスについてガイドラインの活用方法と共に解説する。(セミナー名称などは

随時変更がある)

### ① 導入編セミナー

地図作り活動を始めたい、既存の活動に「まっぶde コミュニケーション(MDC)」を活用してみたい、と言う希望者が対象。

利用するための体制、「活動バイブル」の意義について解説し、操作体験などをして、地域に持ち帰って導入を決定していただくのが目的。

### ② 世話役講習会

活動単位のグループである「コミュニティ」には代表責任者の他に世話役資格を有する管理人が必要で、その世話役資格を与えるための講習会の位置付けである。

もともと重要なのは、「活動バイブル」についての理解である。

「活動バイブル」は雛形が提供されるのでそれを基に、各地域で課題になっている問題を地域の主なメンバーを交えて検討する。特に、何のために、どんな情報を収集し、どのよう

に扱うかを事前に検討して意識合わせを行うことが重要で、各地域独自の「活動バイブル」として取りまとめたいただく。これが地に足のついた活動となり、継続性が保証

できるようになるであろう。

「活動バイブル」には、継続を阻害する要因を排除できるよう工夫がこらされている。

一般に、地域の安心・安全マップ活動は、善意の住民の自発的な意志によって始められ、地域住民の共感を得て活動が拡大していくことが多いようである。その際に暴走気味になるのが世の常であり、反対意見や誹謗中傷を受けることもある。一度そのような状況に陥ると情熱は一気に冷め、活動の継続が不可能な状態になることは想像に難くない。

行き過ぎた行動にならないよう、メンバーが活動の原点に戻って、目的を再確認するなど、当たり前のことを当たり前に実行できるように構成した。

個人の思いではない活動団体全体としての活動方針を定めることで、個人に責任を負わせない仕組みを構築することを実現している。

収集する情報の種類を示す「種別リスト」は、どんな情報を収集するかを検討する際に使用する。他のコミュニティと情報の解釈がブレないようリストに示されている意味に該当しない使い方は認めていない。

### ③ コミュニティの開設

各コミュニティ合意の上、活動バイブルで定義した内容はBigMap事務局にて確認され、問題がなくなった時点で「まっぶde コミュニケーション」に必要な設定が行われる。「活動バイブル」はその設定のための仕様書でもある。

### ④ 情報収集

「活動バイブル」に沿って、情報収集活動に入る。事前にアンケートなどで広く情報を集めて方針をたて、実際に現地を歩いて自らの目で確認することが重要である。その際、デジカメなどを持参し、写真や動画で記録を残すことも役に立つ。時には子供たちを交えたフィールドワークも意義がある。「まっぶde コミュニケーション」は、いつでもどこでも情報登録が可能なことから、メンバー個々に日常生活の中に活動を入れ込むことができる。毎日の通勤時やお買い物、登下校見守り時などでもありそうである。日常の防犯パトロールなどの地域活動の中から情報を得て、更新を行うことも重要であると考え

## 5 課題の特定について

収集された情報は、人によって見方が違うこともあり、入力ミスもあり得るので、ある程度情報が集まった段階で、確認作業をする。

その後、地域住民を対象にしたワークショップ等のミーティングを行い課題を明確にしていこう。

ワークショップにおいては、出力された地図を貼り合わせて大判の地図を作成し、ここに写真等を貼り付けるなどして、地域の課題が一目でわかるような地図を製作する。

これらのワークショップに参加した地域住民においては、地図の製作過程を通じて、地域が内在する問題を、自身が考え、表現することによって、自分のこととして認識させることにつながる。ワークショップに参加しなかった方に対しては、地域内部における問題点の発信と共有が可能となり、地域共通の課題として、住民自身が共有する。

## 6 活動計画の更新

新たな視点として、一連の活動の終りに次の活動へ繋げるための「活動計画の更新」を重視した。活動サイクルは1年でも1か月でも良いが、単なる反省会に終わらず次へ

発展する機会として、「活動計画の更新」を位置付けている。

## 7 セミナーの開催

作成したガイドラインを3つの地域の活動の実情に即しているかを検証するために、各種のテキストを活用してセミナーおよび講習会を開催した。

これらのセミナーおよび講習会の参加者は、学校のPTAや町内会、街作りのために活動している地域の任意団体などである。

セミナー中、後に質問などをいただき、フィードバックを行った。2回開催され、現在も続けられている。(写真1)

## 8 今後の展開

教材もセミナーも進化を続けている。検討委員からは、これらのノウハウは本にするべきとの意見もいただいた。

インターネットに絡む問題も多発していることから安全マップである「まっぷ de コミュニケーション」も安全な

利用範囲も防犯や子供の安全からバリアフリーなどの福祉関係、観光系、アート系へと発展し始めているので、そ

れらに対応が急務である。

## 9 エピローグ

今回の研究活動のなかで「フィールドワーク」は、子ども達の「見る目」を養うことにより、自分自身で危険察知能力を身に付けることをねらいとしているが、本当にそこに到達するのであろうか？という疑問が寄せられた。

子どもや大人、地域のお年寄りにも参加してもらい屋外に出て実際に歩いて全身で感じてもらう「フィールドワーク」。初めて、参加すると長年住み慣れた地においても新しい発見が多く、非常に楽しいという感想が多く寄せられる。一方で、屋外での活動は事前準備が結構たいへんである。

平和で穏かなわがまちの「粗探し」になっていないか？

以前「危機意識をいたずらにあおると、自分のまちが嫌いになってしまいます。」との指摘があった。また、ある新聞社の方から、「悪い人とは、サングラスをしてマスクをして、黒い服を着た人で良いのか？」と疑問を投げられたこともある。この認識は人を形でしか見抜けない、間違った教育であることがわかる。

大人も子供も互いに気づく

ことができる活動でなければ、まちは良くならないのである。子どもだけでなく、大人の意識の向上も重要である。

そこで、安全対策がされている事実を地図に収集する方法を提案したい。

まちが安全になればなるほど無菌室に居る幼児のように抵抗力がなくなる。比較的完全な環境で、抵抗力をつけるためにはどんな方法が効果的なのであろうか？

安全であるには理由があり、それを意識させる方法があるはず。

道路にはいろいろな施設がある。たとえば、カーブミラー。どうして、ここにカーブミラーがあるのか。たとえば、ガードレール。斜め横断するには邪魔なガードレールだが、何の役に立っているのだろうか。

このようなことが理解できるようにになると、先人が自分たちのためにいろいろな対策を実施してくれていることがよく分かるはずである。

そして、カーブミラーがなかったら、ガードレールがなかったらどんな危険な可能性があるのか。それがわかると、カーブミラーのないところやガードレールがないところで、どう気をつけなければな

らないかが自然と理解できると期待できる。

危険な場所を探す、無から有を生むような活動は子どもには難しい。しかし、既に存在するモノから、考えていくことは比較的容易なはず。

更に、安全対策のみならず、まちの歴史的な事実に関する問いかけや、水害時の痕跡、地域の名産など、枚挙に暇がないはずである。そして、そのようなポイントこそ地域の、特にお年寄りが記憶に留めていることで、参加を促しやすい。

このように、まちのいろいろな事々に関心を持たせることで地域力を高め、犯罪を起さしづらいまちをつくることのほうが、健全で活気ある街作りに繋がるだろう。

新たな研究テーマとしていきたい。

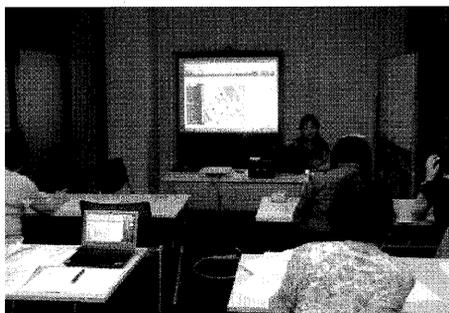


写真1 世話役講習会の一コマ